

# モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



## 2013年8月、 遂に日本のコンペに出場

前号の末尾に「続く」としたが、話はいきなり現在に飛ぶ(すみません)。先の8月、カンボジア人高校生の日本でのコンペ出場が、日本山岳協会の招聘によって実現した。経緯はいずれ書くとして、鮮度の高いうちに奮戦の模様を紹介したい。

日本にやってきたのは、17歳

男子のセイハ、18歳男子のメサ、それに監督(教師)のサローン。セイハはカンボジアで僕らが開催するコンペ、アンコール・カップで2回優勝した。頑張れば日本でも通用するかもしれない。セイハだけ8月10日に開催されるコンペ(第16回JOCジュニア・オリンピック大会)の凡そ1ヶ月前に来日、浅井和英さんが経営するジム、信州・佐久の佐久平ロッククライミングセン

## 目指せ、 アンコールクライマー誕生!!



8/11、JOCジュニア・オリンピック・大会、予選2日目のセイハ。出だしのムーブ。ここはスムーズにこなした。



8/11、JOCジュニア・オリンピックカップ・大会、予選2日目のペース。本プロジェクトを支援してくれたモンベルが提供するビッグタープで。浅井コーチ(右端)と、おどけるメサ(中央)、セイハ。

ターに住み込んで、彼の指導を受けた。カンボジアでの戦績ナンバー2のメサは高校の卒業試験が重なって、日本にやって来たのはコンペ直前の8月8日だった。試験勉強のため、一ヶ月ほどクライミングができなかった。メサは成田空港から僕らの車に乗って、佐久でセイハと合流、そのままコンペ会場である富山県南砺市へ向かった。

そして予選2日目。気温35℃。ふだん、シエムリアプの強烈な陽射しを受けて登っている2人にも決して楽ではなかった。日本も相当暑いのだ。すでにメサのアテンプトは終わり、カンボジアチームはセイハの1本を残すのみとなった。セイハはスタートから淀みのないムーブをつないで、6本目のランナーにクリップした。しかし、次の小さなホールドを取った途端にあっけなく落ちた。いつもの粘りを知っている僕はあるぐり口を開けた。競技運営スタッフのひとり

が僕にこういった。「ぜんぜんお話にならないね」とはいえ、彼

らの下位にもまだ日本の選手はいたのだ。その選手が気の毒に思えてきた。

セイハは予選20位、メサは23位、2人とも決勝には進めなかった。しかし、環境や社会状況など、本人にはどうしようもない条件や、ほとんど実戦経験を持たない彼らとしては、決して悲観すべき内容ではなかった。彼らのクライミングはスタートしたばかりだ。セイハのあつけないフォールはそれをよく示していた。そして、2013/8/11のそのとき、彼らのクライミングはようやく世界へ向かって開かれようとしたのだ。

3人が母国へ帰る前に、東京でお別れ会が日山協の主催で行われた。競技委員の一人が立ち上がり、日本のスポーツクライミングはもう余地がないほどに発展している、と言った。でも神?会長は、まったく別のことを言った。貧しい国々も公平な環境のもとで参加を目指すように応援したいといった意味のことを述べて、その場を締めくくったのだ。